

オピオイド依存脆弱性の指標となる遺伝子依存症リスクスコア (GARS)

要約

ドーパミン放出を抑制する神経伝達物質及び遺伝子の相互作用が脳報酬カスケード (BRC) である。遺伝的であれ後天的であれ、BRC 内の変異により、人は依存行動やそれに替わる痛み受容行為へと陥りやすくなる。関係する科学者及び臨床医グループによって始められたこの協議において、報酬欠陥症候群 (RDS) と定義される痛み、薬物依存、またその他の強迫的行動への脆弱性を正確に予見する最初のテストである遺伝子依存症リスクスコア (GARS) を検証する。痛みの伝達経路におけるドーパミンの作動性に基づいた、後天的オピオイド、医原性薬剤依存及び死亡に対処する斬新な戦略が提案されている。痛みへの感応は、遺伝的多形が痛みへの脆弱性あるいは耐性と結びついている中脳辺縁系で起こっている可能性がある。それらは痛み治療において役に立ち、さらにその後の薬物依存リスクを認識できる独自の治療目標を提供している。CB1、ミュー受容体及び PDK 1 などの候補遺伝子の薬理ゲノム検査の治験は、薬理ゲノム科学的個人的解決につながり、また、より良い臨床結果につながるだろう。とりわけ発病の可能性のある人々における、全ての RDS 行動の危険性を遺伝子的に特定することは、地方自治体がより効果的な予算配分を行えるようにアシストする最前線のツールになり得るだろう。